

問題解決能力を育てる社会科学学習指導方法の研究

- 身近な社会的事象の教材化を通して -

三瀬村立三瀬中学校 教諭 馬場 司

要 旨

社会科では、社会の変化に主体的に対応し、様々な問題をよりよく解決するために必要な資質や能力、すなわち問題解決能力の育成が求められている。そこで、身近な社会的事象の教材化を図り、課題学習を通して、他者とかかわりながら、問題解決に取り組めるような学習指導方法の研究を行った。

その結果、生徒は社会的事象の中から問題を見だし、解決を目指して意欲的に学習活動に取り組んだ。その過程の中で学び方や様々な見方・考え方など問題解決のための諸能力が高まり、他者とかかわりの中から、自らを見つめ直し、将来を考えようとする態度が身に付いた。

<キーワード> 問題解決能力 社会的事象の教材化 課題学習 自己評価・相互評価

1 主題設定の理由

目まぐるしく変化する社会の中で、情報化や国際化、高齢化など子どもたちを取り巻く環境は急激に変化し、学校においても、家庭においても様々な問題を抱えている。新学習指導要領においては、今後の社会の変化に対応するために子どもの「生きる力」の育成を基本とし、自ら学び、自ら考える教育への転換が求められている。社会科学学習においても、網羅的で知識偏重になりがちであった学習から「社会の変化に自ら対応する能力や態度を育成する」ことが求められ、そのために基礎的・基本的な内容を確実に身に付けさせることや生徒の主体的な学習を一層重視すべきことが強調されている。

これまでの指導では、問題解決的な学習を設定しても知識の習得が中心であり、「学び方を学ぶ」という点では不十分であった。一方、授業の中で身近な問題や生徒のもつ疑問や課題を取り上げると、どの生徒も自分の考えや意見を発表したり、新たな疑問を提起するなど、生き生きとした姿が見られた。

そこで、生徒にとって身近であり、現実に直面している問題（社会的事象）を教材化することに着目した。そして、教材化の手立てを工夫することで生徒のもっている知的好奇心や探究心を揺さぶり、自ら課題を発見するようにしていけば、より学習意欲が高まっていくものと考えた。さらに、適切な課題を設けて行う学習（以下、「課題学習」と略す）を通して多面的・多角的な思考力や判断力を育てるとともに、課題を追究したり、その結果を表現したりするなど、「学び方を学ぶ」ための学習の場を工夫することによって、自ら学び、自ら考え、問題解決に意欲的に取り組む力、すなわち、「生きる力」が生徒にはぐくまれるであろうと考え、本主題を設定した。

2 研究の目標

生徒にとって身近で、現実の社会的事象を扱った社会科学学習を通して、生徒が問題解決のための諸能力を身に付ける学習指導方法の在り方を探る。

3 研究の仮説

課題学習において身近な社会的事象を教材とし、現実の問題を生活体験や経験を通して、調べ、考えさせ、お互いの考えを練り上げる場を設定すれば、生徒の追究意欲が高まり、自ら問題解決に取り組む力が育つであろう。

4 研究の内容と方法

(1) 研究の内容

- ア 身近な社会的事象を教材化するための手立てについての研究
- イ 問題解決のための諸能力，課題学習についての理論研究
- ウ 仮説検証のための指導方法の研究
- エ 評価についての研究

(2) 研究の方法

- ア 生徒や地域の実態調査と，その分析及び考察に基づいた社会的事象の教材化の方法を開発する。
- イ 先行実践事例や文献等による調査・研究を行う。
- ウ 単元の分析，教材の開発，指導案の作成，検証授業の実践と分析及び考察を行う。
- エ 評価方法について，文献等による調査・研究を行う。
- オ 研究をまとめ，成果と今後の課題を明確にする。

5 研究の実際

(1) 問題解決能力

ア 問題を見つめる

社会的事象や社会的問題とかかわっていくためには，まず，既習知識や生活経験などを基に，自分なりに社会的事象をとらえる必要がある。そして，社会的事象を見つめ，観察する中から何が問題であるのか，どこに問題があるのかを発見し，解決すべき問題を明確にしなければならない。

イ 問題に取り組む

明らかになった問題を解決していくためには，自分なりに学習の計画を立てることが必要となる。問題の解決に向けてどういう情報が必要なのか，その情報はどこで入手できるのか，そして，どういう情報収集の方法があるのかなどの見通しを立てて学習に取り組まなければならない。そして，収集した情報を選択，分析，活用することのできる能力が必要となる。こうした力を育成するためには，問い方や調べ方といった，いわゆる学び方や社会的見方・考え方を身に付けさせなければならない。

ウ 人とかかわる

社会的事象や社会的問題と取り組み 解決を目指すためには多くの人々とのかかわりが必要である。問題に直面している人々の願いや思いを知り，その願いや思いに共感する心が大切である。それにより，問題の共有化が図られ，切実感をもって問題の解決に取り組むことができる。また，自分の思いや考えを分かりやすく表現するとともに，様々な見方や考え方に気付き，交流することで互いの考えを高めることができる。問題によっては集団の合意形成を見いださなければならないことも生じてくるが，その時には多面的・多角的な見方や考え方に基づいて，公正に判断できるような能力の育成が必要である。

エ 自分と向き合う

問題解決能力育成の必要性は，社会の中で発生する様々な問題は，社会的な解決のための手立てを考え，考えたことを社会全体で実践しなければならないところに存在する。そのために，社会的事象の中から見いだした問題を自分の問題としてとらえることが必要である。また，他の人とかかわっていくことで，自分の見方や考え方の良い点や不足している点（自分自身の問題）に気付き，独り善がりではなく，自分をより良い方向へ高めていこうとする態度，すなわち，自分自身の問題解決を目指す力が育つ。そして，やがて自分の将来や生き方を見つめようとする態度が身に付いていく。

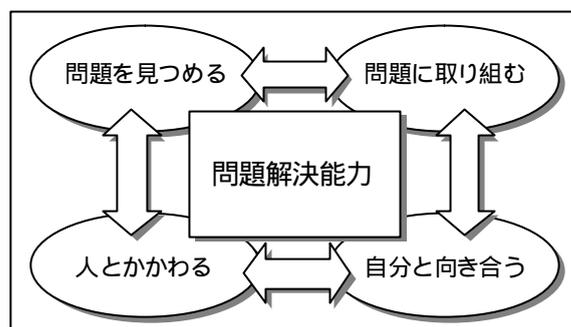


図1 問題解決能力の分析

オ 問題解決能力を育てる学習過程

「練り上げる過程」を重視して授業のプロセスを考えた。その理由の1つ目は、調べたことをそのまま発表するだけで、実際は発表者も、聞き手も内容をよく理解できていないというこれまでの課題学習からの脱却を目指そうと考えたからである。2つ目の理由は、「練り上げる」ことでお互いの考えを磨き合い、高め合って、学習の成果の共有化を図ろうと考えたからである。そして、3つ目の理由は、問題意識や追究の場を仲間（他者）と共有することが、一人一人の追究意欲を互恵的・相互促進的に支え合い、高め合うと考えたからである。生徒は、「自分の考えを知って（分かって）ほしい」、「仲間の考えを知り（分かり）たい」と常々思っている。自分の考えが仲間にどう評価されるかということに最も関心があり、正当に評価されることで自分の学習の成果と課題を認識する。また、協同的な学習の中で意欲的に学習に取り組む姿はグループ全体の学習意欲を誘発する役割を果たすものと考えた。

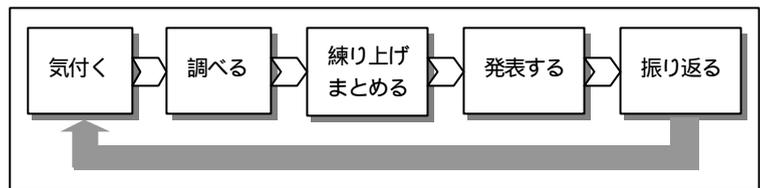


図2 問題解決能力を育てる学習過程

生徒の知的好奇心を喚起し、学習意欲を高め、主体的に学習活動に取り組ませるためには、生徒が中程度のズレを感じるような、これまでの既習知識や生活経験に基づいていながらも、それだけでは解決できない問題を含んだ教材を工夫し、提示していくことが大変重要かつ効果的である。その中程度のズレを感じさせる教材化のポイントとして、「驚き」「疑問」「困惑」の3つが考えられる。その3つのポイントに着目し、身近な社会的事象の教材化を進めていくに当たって右の点に配慮した。

(2) 身近な社会的事象の教材化

生徒の既習知識や生活経験を生かす。
 生徒や地域の実態を考慮する。
 問題の解決に当たって地域の力（人材や施設、設備など）を生かす。
 問題にかかわる人々の多様な見方や願い、生き方に気付き、共感する。
 生徒自身の生き方や考え方を見つめ直す。

(3) 評価

ア 評価方法の工夫

2つの視点から評価方法の工夫を行った。1つ目は、学習過程を重視した形成的評価を主体とし、その評価方法として自己評価を行うことである。生徒の主体的な学習を促し、自ら学び、自ら考えるような教育を進めていく以上、生徒が自分で学習内容や学習活動、学習意欲、学習態度などに関して自分自身を評価し、その後の学習内容や学習活動の在り方を見直していく必要がある。問題解決能力を身に付けるには、自分自身に対する評価を行う能力や態度を育成しなければならない。2つ目は、相互評価（他者評価）の場面を取り入れることである。確かに自己評価は有効な評価方法であるが、相互評価と併用することにより、更に客観性をもつ評価となる。そのためには、他者からの評価情報が提供される場を設定し、他者の判断と自分の判断とを照合して、自分の学習を振り返ったり、自分の考えを見直すような場面を取り入れることが必要となってくる。

イ イメージマップによる自己評価

1時間ごとに自分の学習を振り返り、次時の学習の方向性を考えるとともに、課題学習全体を通じた長いスパンでの自己評価が必要である。単元の始めと終わりに、教材に対する自分の認識の変化などを生徒自身がつかむことができれば、自己

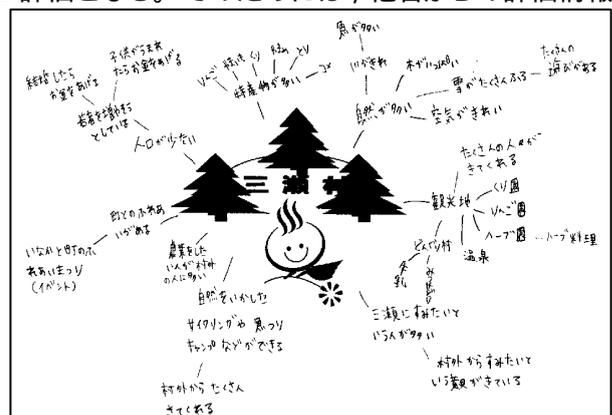


図3 イメージマップ

評価の有効性が更に高まる。岩田一彦は「社会認識，市民的資質にかかわる表現をさせ，メタ評価をさせれば自己評価が有効に働く」⁽¹⁾と述べ，更に「子どもが自分の成長を書くことができたならば，有効性の高い自己評価ができたことになる。こういったメタ評価をさせることは自ら学が要因となる」⁽¹⁾とも述べている。そこで，今回，課題学習の「気付く過程」と「振り返る過程」において，図3のようなイメージマップの作成による自己評価も行った。

(4) 授業構想

これまでの理論研究を基に授業構想を図4のように考えた。身近な社会的事象として「三瀬村」を教材とし，課題学習を通して問題解決能力の育成を図る。その学習過程において「問題を見つける」「問題に取り組む」「人とかかわる」「自分と向き合う」という4つの概念に基づいた諸能力や態度を高めるための学習指導方法の工夫に重点を置いて研究を進めた。

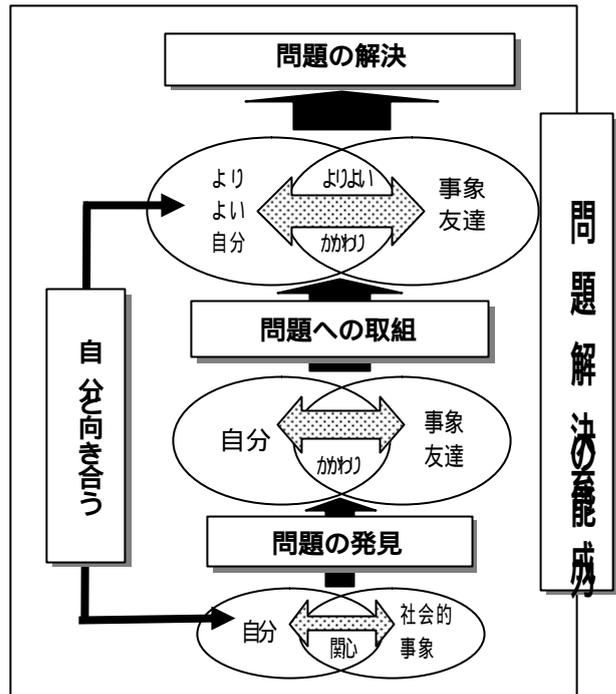


図4 授業構想

(5) 授業による検証

表1 学習指導計画

過程	教材・教具	学習活動・内容	問題解決にかかわる力(印)支援(・印)
気付く	検証授業1 私にとって三瀬村とは ・VTR, 写真, イメージマップ 三瀬村の将来を考える ・アンケート, インタビュー 三瀬村の村おこしを提案しよう ・村おこしカード ・調査活動計画書	・資料から三瀬村を見つける。 ・三瀬村をイメージマップに表現する。 ・三瀬村の現状を知り, 将来を予想する。 ・村民の思いや願いを知る。 ・村おこしについて自分の案を発表する。 ・グループ内でテーマや調査項目を決める。 ・調査活動の計画を立てる。 ・自己評価・相互評価を行う。	・学習への意欲を喚起する。 自分の考えを表現する。 資料から情報を読み取り, 分析する。 他者の心情に共感する。 自分の考えや意見を発表する。 ・ブレンストーミングを用いる。 調査活動の見通しを立てる。 評価カードに記入する。
調べる	検証授業2~3 村おこしについて調べよう (資料) 資料集, 村史, 事典, 文献, 写真, 統計, インターネットなど (場所) 教室, 図書室, パソコン室	・村おこしについて様々な工夫やアイデアがあることを知る。 ・三瀬村と類似した地域が多くあることに気付く。 ・グループのテーマに沿ったものを考える。 ・自己評価・相互評価を行う。	見通しをもって活動に取り組む。 目的に応じた情報収集をする。 多面的・多角的にアプローチする。 調査結果から自分の考えをまとめる。 評価カードに記入する。
まとめる	検証授業3 村おこし案を作成しよう ・調査結果 ・各自の村おこし案	・各自の調査結果をグループで発表する。 ・グループの村おこし案を作成する。 ・実現性が高いものになるように意見を出し合う。 ・発表方法をグループで決定する。 ・自己評価・相互評価を行う。	情報を整理しまとめる。 各自の意見を尊重する。 提案の根拠をはっきりさせる。 分かりやすく伝える方法を考える。 評価カードに記入する。
まとめ上げる	検証授業4 村おこし案の中間発表をしよう ・グループの村おこし案 三瀬村村民集会の準備をしよう ・村おこし案(広用紙) ・発表原稿	・1回5分(発表3分, 質疑2分)で5回行う。 ・全員が1回ずつ発表する。 ・質疑で出された内容を整理, 分析する。 ・村おこし案の見直しや再調査を行う。 ・発表原稿を作成し, 役割分担をする。 ・自己評価・相互評価を行う。	・ジグソーソッドの形式で進める。 自分の考えを進んで伝える。 疑問や問題点を見付ける。 他者の意見を基に見直しをする。 発表原稿や表現方法を見直す。 評価カードに記入する。
振り返る	検証授業5 三瀬村村民集会 ・村おこし案(広用紙) ・発表原稿 ・ワークシート ・イメージマップ	・村おこし案をグループごとに発表する。 ・1グループ終わるごとに, 評価を行う。 ・三瀬村に最もふさわしいと思う案を選ぶ。 ・講師の方の講評と話を聴く。 ・自己評価・相互評価を行う。 ・三瀬村を再度イメージマップに表現する。 ・イメージマップを比較し, 自己評価を行う。	分かりやすく伝える。 根拠となる資料を明確にする。 他のグループの発表を認め合う。 公正な視点をもって判断をする。 評価カードに記入する。 自分の教材に対する見方や考え方の変化を自分自身でとらえる。

ア 問題を見つける

身近な社会的事象として「三瀬村」を取り上げた。検証授業1では，VTRで名所や旧跡をクイズ形式で示したり，インターネットで人口の将来予測をしたり，村民の意識調査やインタビューを紹介

するなど教材化の手立てを工夫した。その結果，図5 から，今回の授業によって三瀬村のことに興味のある生徒が 18 名(64%) から 27 名(96%)に増加したことが分かる。身近な社会的事象を教材化することの有効性が実証されたと考える。

イ 問題に取り組む

図6 から，検証授業全体を通した学習過程と学習意欲の高まりとの関連を見てみると，すべての学習過程において80%以上が「とても意欲がわいた」「意欲がわいた」と答えている。しかも，学習過程が進むにつれ学習意欲が高まっていることから今回の学習過程と各学習過程における学習活動の工夫が有効であったと考えられる。また，「授業中の疑問を自分で調べる」と答えた生徒も 14 名から 23 名(82%)に増えており，調べ方を身に付け，自ら学ぶことに自信を深めたことがうかがえる。

ウ 人とかかわる

表2 から，検証授業4の中間発表や検証授業5の村民集会では「練り上げる過程」や「発表する過程」を通して，学習の共有化が進み，同時に，「人とかかわる」ことで多面的・多角的な見方や考え方も身に付いたことがうかがえる。そして，図8のように，自分の考えを伝えたいと「とても思う」「少し思う」ようになった生徒が，26名(93%)に増加した。これは，自分の考えを友達に伝え，それが受け入れられたことに自信を深め，より分かりやすく表現したいという意欲や，更に友達のことを知りたいという知的好奇心が高まったことの表れであると考えられる。

表2 村民集会(検証授業5)の感想

- ・みんなで1つの案をどんどん発展させていくのは，とてもいいと思います。
- ・自分の意見を他の人に教えたり，他の人の意見もたくさん聞くことができたのでとても良かった。
- ・他の班の意見がすごくいいアイデアだったり，実際にできそうなこともあったりして，いろいろ考えることができた。
- ・友達のことを聞いて，とても感心しました。みんなでいろんな考えを言い合っただけ楽しかったし，新しい発見ができた。

エ 自分と向き合う

図8 から，今回の授業によって三瀬村の将来を考える生徒が 10 名(36%) から 27 名(96%)に増加した。身近な社会的事象を教材としているので予想されたことではあるが，三瀬村の問題を自分自身の問題であるととらえ始めている表れだと考えられる。

イメージマップを分析した図9を見ると，書き込まれた語句の全体の数は，授業前の254から授業後は532と2.1倍に増加している。しかも，書き込まれた語句の内容を見ると，「自然に関する語句」が1.2倍の増加に対して「自然以外の語句」が3.9倍も増加している。全体に占める割合を見ても「自然に関する語句」が68%から40%に減少し，一方「自然以外の語句」が32%から60%に増加している。これは，今までの三瀬村に対するイメージが「自然」に関するものにとどまっていたのが，

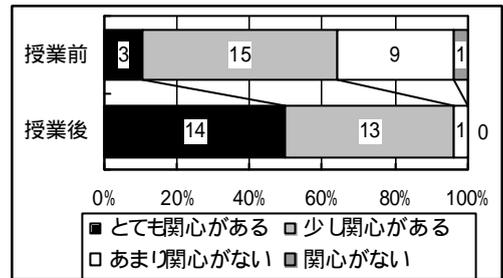


図5 三瀬村に関心がありますか

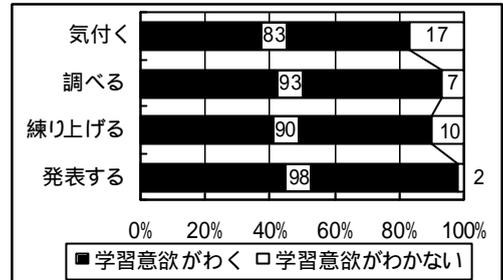


図6 学習過程と学習意欲について



写真1 中間発表会



写真2 村民集会

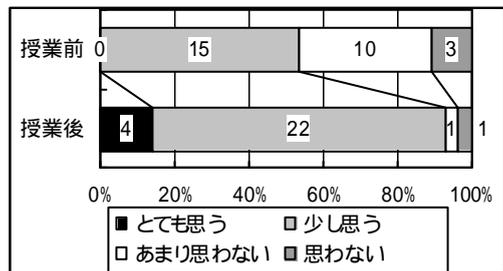


図7 考えを伝えたいと思いますか

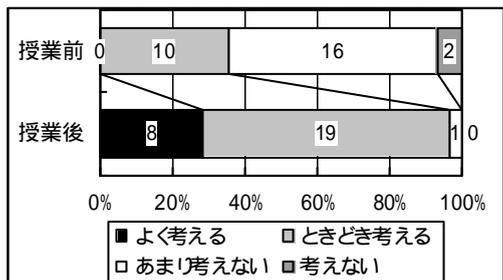


図8 三瀬村の将来を考えますか

表3 イメージマップの感想

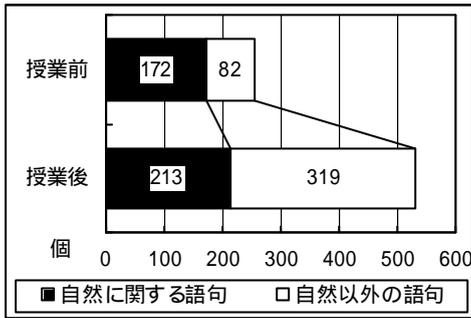


図9 イメージマップの語句の変化

- ・村外の人が三瀬のいいところをたくさん分かってきていてよかった。たくさんの人の意見で、村を動かして、実行できたらいいと思います。
- ・三瀬はただのいなかだと思っていたけど、今ではこんなにすばらしい村なんだよと、三瀬を知らない人に教えてあげたいし、自慢したい。
- ・イメージマップが各班の意見や自分たちで調べたことがいかされて、2倍くらい書けました。様々な面で村づくりが考えられて良かったです。
- ・イメージマップの内容がくわしくなった。イメージがマイナスからプラスに変化した。今、三瀬に住んでいるということは、ほこりに思わなきゃならないだろう。

今回の検証授業を通して、社会的事象に対して多面的で多角的な見方や考え方ができるようになったと考えられる。

イメージマップを比較・検討した感想の中にも、表3のように村のよさに気付いたり、新たな発見をしたり、自分の村を誇りに思えるようになったことなど、ほとんどが「三瀬村」に対するポジティブなイメージが広がっていた。また、社会的事象を多面的・多角的にとらえることができるようになった自分の変化に気付いたものも数多くあった。こうしたことから、現実の社会的問題を自分の問題としてとらえ、様々な見方や考え方を基に問題解決を目指そうとする意欲の高まりがうかがえ、学習の成果が表れたものと考えられる。

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

ア 身近な社会的事象を教材化することで、生徒の既習知識や生活体験、経験に基づいた知的好奇心が喚起され、問題を追究しようとする意欲が高まった。また、社会的事象の中から問題を見だし、自分自身の問題として解決に取り組もうとする態度や意欲が見られた。

イ 課題学習において学習過程に「練り上げる」場を設定することで、多様な見方や考え方に気付き、それを基に自分の考えを見直すことができるなど、一人一人の意見や考えの高まりが見られた。また、意見交換を通して学習の共有化が図られ、互いの成果を認め合うことで一人一人に充実感や自己効力感が生じ、他者に自分の考えを伝えようとする意欲が高まった。

ウ 今回の授業において、調べ学習や発表会など生徒の主体的な活動を促す場面を数多く設定することで、調べ方や表現の仕方など自ら問題解決に取り組むための諸能力が身に付いた。また、新たな問題の解決に取り組もうとする意欲の高まりが見られた。

エ 「振り返る過程」を設定し、自己評価を行わせることで、生徒が自己の成長を振り返り、自分の認識の変化などに気付くことができた。

(2) 今後の課題

ア 問題解決能力の育成を位置付けた年間指導計画の作成

イ 社会的事象の教材化における学習課題（問題）についての研究

ウ 自己評価について評価方法の開発と分析の研究

エ 必修社会科と「選択社会科」「総合的な学習」との関連についての研究

《引用文献》

(1) 岩田 一彦 『社会科固有の授業理論』 2001年 明治図書 p160

《参考文献》

- ・ 羽豆 成二 『子どもの〔生きる力〕が育つ社会科授業の改造』 1997年 文教書院
- ・ 森分 孝治・片上 宗二編集 『社会科 重要用語 300の基礎知識』 2000年 明治図書
- ・ 文部省中学校課高等学校課編集 『中等教育資料 7月号』 1998年 文部省